

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

児童精神科医から見た医師育成の現状

市川 宏 伸 (東京都立梅ヶ丘病院)

長らく「これから増加するのは高齢人口である」という考えで、多くの予算が高齢者対策に使われてきた。しかし、高齢者を支えるのは成人であり、健康な成人の増加には児童・青年の健全な育成が必要なのは言うまでもない。残念ながら、これらの考えは顧みられず、少数の医師が乏しい予算の中で、児童・青年のこころの問題に取り組んでいたのが実情であった。このような状況の中で、児童・青年による了解の難しい事件の増加が契機となって、児童青年精神科の必要性が強調されるようになったことは皮肉なことであった。子どものこころの分野を担当するのは、子どもを担当する精神科医であり、こころの問題に興味のある小児科医であった。診療には時間を要し、薬物治療は中心的治療法にはならなかった。医師、看護師、保健師、心理士、精神保健福祉士、作業療法士、保育士などの医療スタッフのチーム医療が必要であった。医療機関以外にも、保健所、児童相談所、学校、教育相談所、福祉事務所などさま

ざまな機関との連携も必要であった。平成10年前後からの、不登校を中心とした来院者は発達障害(知的障害のない)に替わり、この分野の患者の著しい増加を来し、少ない医療機関はさらに多忙となっていった。特に専門病床を持つ医療機関は少なく、採算を考えれば、民間医療機関が手を出しにくい部分であり、少数の公立医療機関が担当していた。教育、福祉、労働などさまざまな分野でこの分野の医療の必要性が叫ばれるようになり、厚生労働省も母子保健課が中心になり「子どものこころの診療医」の養成に乗り出した。さらに採算を考えて、思春期加算(精神療法、入院治療)などが新たに設けられた。シンポジウムでは、児童青年精神医療機関の現状、「なぜ医療機関も医師も増加しなかったのか?」を中心に、この分野の医師育成の現状及び、今後の展望などについても考えていきたい。

(この論文は抄録集より転載しました)